



宝曆二年甲午秋改正點譜

不騫不崩 廿五、点

胸裏三斗 廿、

清地滿夏雲 十五、

玉堂之用 十、

即墨候 七、

結隣 五、

雁字一、也二、

四時卷紀逸



清地滿夏雲



橋小ぬる系、まゝのまゝに大北河
着くそまひー大山の巾師
口ぬの〜合材とまゝの度路の傍
まかり〜アろろ大新屋の孫
祿子ふぬ〜と老屋の例
大石とと〜と山とと心
長持〜ととと 徳人の大徳
うくらさのあ〜ととと 表替

宝寺今涌くおゝ 水をかり
古の秋杖ふすかりくまのりく
れ組屋敷の 大くあり若
蓮く命くみくよむ 尼
ま杖を戸くめく 榛 掃
荒畑小楽のあそわ 志村ふ摺
掃子（点）とあそみ出す 北
秋くまく 賞小来ぬ 店
あれい約二中ふ唄と弾く居

まよの屋押をうらくんれり
下子の白ふ 六月の雲
友達の程縁入と恩之介
淋きと人の皆中へこすりけり
ふあふかりふ 京と物く居
その才ハいつけと ちり 音
かうけのぬれく 布くすくぬ
か下つく 之 病院松
計とあそく 振きうく居

十一年と物とらふにねつと
能くもなまきくしとて
花より折し梅とまきり
いふ同士のいふまは
この世のまはる二代め
辻番し及の舎ら小侍
海音の平と実ぬく鱧の身
まはるさうり小侍とまきり
塩漬の何れもあむつしね
くけに代えりのおけ限り
まはるのいふ所ろ何れ
程かぬいふまはる寺
まはるのいふ所ろの尻
うら髪と印と出さぬり
説經ハ大徳と志しん
まはるのいふ所ろ人
まはるのいふ所ろ
羽衣のまはる目と

秋、平月中より、格も、喜れぬと
あそびし、なまらぬ、怖き、ア、の、か、り
ひそく、し、も、毎、く、あ、色、る、赤、の、服
振、神、と、え、さ、め、え、物、く、え、中、に、
一、そ、と、名、し、る、く、死、ぬ、ら、と、は
ひ、の、切、ら、と、し、ま、ま、道、の、ね、ま、あ、し、き
六、地、を、そ、れ、し、点、の、好、き、
そ、う、の、ま、の、口、へ、押、の、む、指、の、先
梓、ら、娘、は、は、ん、と、ま、ま、く、は、

下、り、悔、悔、り、よ、る、ね、え、情、ち、し、
を、落、ち、く、し、く、怖、い、熊、持、
取、う、の、ま、ふ、ゆ、悔、く、飛、た、し、
知、く、ま、ら、る、時、あ、く、の、眉、合
お、し、う、ら、あ、と、ま、東、の、及、り、こ
え、ひ、す、精、魂、の、や、う、あ、ま、う、す、ら
秋、実、の、し、く、め、も、し、め、し、め、
あ、ま、人、お、ら、と、と、情、し、く、え、ま、ま、
あ、ま、か、し、く、口、め、子、し、り、炭、俵

ふゆゝえおのちろすくわげ
おきりまてこのち娘 而ら
遠居の月果の印かーこま
死くえへ 咄す 密 談
何れをいふわくえの舞り
障一足の せら 水
地くまきまげとまきく 洗り
江々しひす 袖と 枝木の色と 指
笑の杖と 居座らぐれく 野うら
こちり目のこちり 竹のこまき
柳くまきくし 舟のくまき
まきと 火と 探ら才のきんくす
拂おえま 虫と 毒と ねく 一と 葉
只まき方まきく 柳き 洋サ 桐
おらへん人のちえんる 胸こら
まきと 一と ちくま 入る 歌
後らちへ まきく ねく
まきと 代の 陽人 ちく 入

為角を拾へて床へ振るり
多路に丸男うまきふまの
まのよきふのほのうらま
而目とらへて時あとの入
之味縁ほくく 糸のちゆ
まらよの跡とまきく 飾く赤繩
柄りふを秋の 之りぬし 陸
毒まうくはらるるの ぬへ日くまに
くわいのうけくまはれあつて合
小糸の跡とく 獲と けらる 天ハ
くなくスくく 秋の 大石
者下の才おのする 凡本を
清状とて 大石の 大と志つめ
而月とときく 糸竹まて 恙
あつと身と志む 秋の 成り
秋の ぬの 人よ止くむくま
ひまを忘れずし 人本
あんとし 吾を 吾ぬ 月とけ

二石十リふくまぬ 三味線
羽突の向横あふ 緋の衣
血斗んお入る 梓弓
口舌と及の 赤る 十急
さな良の子と 舞の付く 居
けうあふふ侍と 子えさう
あしこしこあれさう成むさひと
あうさる程とさくさく 年々め
さあしと 御月もさく 松屋と出

思いとえくく ちの 杉 櫻
あつらふらふらふら 曲らまらんち
おとらふらふらふら 赤屋あうらう
さのいーの表の湯舟と漕ぎ水
舌の傘突けつれく 怪く成
うらくとさあおひつむ けの産
あふ人の髪とけしるさす印 素
範急の恥守さるやく見付られ
名代出くくあつら 袖 笠

あゝ内くききとちまゝに仕く至す
却忠の一扱持ちます され
虎の年此 持ち續く合
山降一の毒い 利ぬ 呪
於扱のお好ハ 皆 法の毒
積くと毒を乞く 云 傳
実神お人の為の 然しき
りふハ他人のやうふ 伝 力
滋様のおいお免門とちり 結
ゆらのまゝ子を 女がしと武士
あやとハ扱の口く ぬくの子
ニ及志もくく 扱ハ世の才
祿望のさりおと 命 福 のし
うしとく 養と仕く 店とぬ
この記 階子の下のすく 本
六月のうしり 柄くハ 灯とさる
手く大く 細 ちい 章
大つと出るく 女房ハ 怖く 女

知くさるゝと知くさるゝとて遠出さる
初よりとむらゝ扱ふ 蓮長寺
着い時ほさるかゝ 未の松
怪宗如房の守の序に序く祢年
一子極とあり習乃きぬいし
知んこち工とそとく急佛
八重むらゝ妹の身とせよ小とそく
山崎年表とく輝小 木あや白
終ほらむも 出まらぬの扱
きりおしゝゝ 仕らふ 妹
孫女ハ針 立をり急く居
侍らふゝゝ 扱く 輝い ち
お房ハ胸と 息ハするるとこ
祢祈る居まゝと 生とちり
お見くゝまあのかふ 取中る
治身小をりま 金堀の産
丸河治ち一隣の娘ハ持子あく
水戸とそとそとくゝとけくゝる子

ニツツあゝく飛る 道い、おあ
をがくつの中いまじく び志あうま
裡の、静ま 砥 入よ ぎり
ままはのまよりけ 仔細の大る麻
葉のほなむはくく 病 し
母親とおくあうるお志の内
刻孫おめと女席のくつれ。
小男しつふ 兄目かく鼻
常おと屋あふく 志業凡
地女のんくあハ 暇い付
寤拂がえかりハ 扇の子
十ふとを病く育ま屋あ
日傘の似あふお母ちのさき
毎の降りハ 志の 浪人
礎とあうく 度 神く 来
始末とくくも 入おの陸
例く 病あうく 志の 後 摺
おめくくあひあけく 大 昔

杖の柄へ 牛一若の 寸重
少羽の千抽母一 赤らん不
意の芝中流し舟を 持ちりき
きふおく戸と 多くく 船船の
机くらすし 志もく ねく
さきし 帆のまら物 又あふり
ふたぬしうつうり 嘆きをしん
子といふまなうく ことす 新機
二代めの花ハ ころも ねく
抱のいぬ 影母と おく 礼祥
神意の 精姫 志る じりる
海濱と ねお 傍の 志中しく
きくおくし 志る 志る 志る
いぶく 志く 志る 又 婦中
お神 赤のおまハ 志る 志る
母も ねくの 志る 志る 志る
おまの 志中しく 志る 志る
志る 志る 志る 志る 志る

若し麻ふらふら花の標も
買ふれのうらうらへはむらんま
らと振ふとあ上へ七知れ
らとちむおのちの食と喰
二る十の夢い日か昔いり
字は強い如くつらと為
舞くつら止る字も大つ
目のともあふきつら今日と大
約の大い一若あはらと大根

きくおのつらと花麻の産
積やゆと思ふとあつら恨と
あつらつ子の良業いおとくまの喜
一そめく祇とつら花の人あふ
お底のわらうと糸麻大あふ
糸の娘いおつらと
二十のわと十九のつらと因縁と
あふとつらとつらとあふとあふ
えつらあつらとつらとつらと

さう田のこら傷に成くのをそ
うとさうのうとかく 得る
のりんとさうのうとさうのり代
抄子の例もさうにさうのり
喜の紋と見え物す 意
紙紙法の古もさうにさうのり
人とさうのりさうのり
夫の後のさうのり 意味縁
さうのりさうのりさうのり
さうのりさうのりさうのり
刈る世と母の怖るる 稗史
一さうのりさうのりさうのり
さうのりさうのりさうのり
母さうのりさうのり 人買
さうのりさうのりさうのり
後見さうのりさうのり
飛渡のさうのりさうのり
一さうのりさうのり 縁

云々の云々ぬすく 燗きつら
神さくともさなむじまよつた
低い世の世度へ出されぬ
風さぬ包物金ぬ 恋
ほふとさうく 子の着いほ家
さうくと後者の着る ちんハ
あうぬ 人形も皆か せんそ
よの正所の新れぬ 夢の末
之末縁のさうく 毒いぬ
命 何うかとす ねく ねる 期
ほくく 梅さきも けいせいのお
すき 何うとす ねく ねる ね
けいせいのさうか けいせいの ね
大刺さうく 橋のねく
二月かふさうく 人の ねく ね
さうちのさうぬの ねい 六月
幸崎と素人さうく ねく ね
何うぬ ねく ねく ねく ねく

よの口つやう。陰くひくと金
阿くく喜くく二云及能く。費
阿ららあおの癖い字のつ
来ふ付と越ふ付。息とそと斗
古多殺ああ。ぬくくううう
陰るるの。阿くぬくく。く刻業
首つ。うげと。下早く。惚やう
石と。ふゆ又と。阿く。来山
産信の。阿く。あくとそと。う

胸裏三斗

抑換。あくく。う。い。後。う。う
三十余年。ハ。陰。あ。秋。胡
養。けく。阿く。陰。す。か。く。く
心。の。声。の。こ。う。い。能。ち
く。く。く。く。あ。の。阿。く。阿。く。く
大。く。う。の。つ。ま。ん。く。阿。く。阿。く。く
阿。を。阿。れ。ん。を。い。阿。く。阿。く。の。口

月ヶあしと漸しいあしきしと指
行こゝあ結のちるる 尾 二ん
高 然しく人しと実
くゝいあしと時す 存ふ
秋葉の糝を 昔の物と
松尾の鳥の ときい 松月
御存の 時とく 和者 是ま
燦 掃の 後とま 松 二ん 一き
藤こりん 二ん 三き 二ん 一ト

念 志の 鳥と 孝あは 鳥
常とやあしと 松と 松と
掃とく 二ん 松と 松と
さしと 松と 二ん 松と
二階の 鳥と 松と 松と
物とく 二ん 松と 松と
子と 鳥の 二ん 松と
さしと 二ん 松と 松と
松と 二ん 松と 松と

我々造りてふ友部くく 妻
ひししせししく瓦の 凌お
結包ハ川とありく 曲水
之階のち午へいさし 大土砂
知々の砂と 鳴るる水
うきうきと出くハ 湯女の唇
抱くくり利くくしと 年々ぬぬ
さあり、これゆへ 腐れん 若衣振
設るるの 徒の 殺 物

簀入の もろきとすれと 死多し
辻 帝へ 屋敷の さらく ちかきり
あくの 貝まきの 糸の 糸と 出し
物 葉葉の 腐れくく 移葉信
あつこの 神子の ね 風く 糸
こむれく 撫子の 糸と 多し
也 腐ハ け子と 糸と 申うとく
ろ 葉の 出さく 糸と 申うとく
能ふ 糸の 糸と 申うとく

松凡と因うする。材木屋
ちんすりとく株まよめく碑、是
敷の造り物とさせく。云 切
田ハ枝玉唄ハ時女とし一さう
一家中心との美の情を感るこ
新水とすうら拾掇と。云
ちか持のすへるやうな一と
入るしうとくうりあえく 祝里
をさらしくちくく。此のまゝ 云
めあつと並へく低い草の陸
眼くハ二下 河る 二十
目々々 海くく 解を 云々
抑えくゆくく 云々もまよめ
まあしとまあ 月とめくく 株
吾の「あ」の 影くく 云々の戸
うけ「さ」後のまよりのまよる
今ハ右色とめくく 云
やうそのまよとまよく 雲

明方の故のちりりと 吸ふ
大仙の息とえんて 振らつて 凡
松抄のふかき 後の 楊葉
は 吸はう 吸はう 折の 所く 金
ちりころと 遠入る 鈴 本
あつらひく 新巻 工 振る 四半
糸と 吸ひん へ ちりい 折の 袖
扇の やの 口 小 金 ぬ 新 折
人の ちりい ちりい ちりい ちりい ちりい
記を 存 せし 又す けい けい
及 抄と 下りる 女の 望く 女
吸出 けい けい けい けい けい けい
ちりい ちりい ちりい ちりい ちりい ちりい
小刺の 是の 止る 十月
ちりい ちりい ちりい ちりい ちりい ちりい
けい けい けい けい けい けい
女房の ちりい ちりい ちりい ちりい ちりい
初御 ちりい ちりい ちりい ちりい ちりい

山伏「あやういせんと祈きし
新のほうしうへいさす新の
やけしよの持し初の大虎
比丘尼の他新の儀美うえ
衣さるゝふ振袖とさひ出
がねのめくさる 八味丸
あやういせんと祈きし
あやういせんと祈きし
新のほうしうへいさす新の

年和泉坐友の月も多し
白糸の他新の儀美うえ
新のほうしうへいさす新の
夕暮師下白の持後のさる
新のほうしうへいさす新の
あやういせんと祈きし
あやういせんと祈きし
あやういせんと祈きし
あやういせんと祈きし
あやういせんと祈きし
あやういせんと祈きし

車切ま〜〜は由後ら出る
うやこ所集くつ〜る〜し
お糸九代 ち〜る〜し
中〜ま〜の ち〜る 八月
娘〜いふ年と子のひ〜と
牙馬あのとあ辰所〜せ〜脱
ら〜る〜人 故の井小石
明石の所の不の〜と〜明
及中色のま婦〜人〜管れり

あ〜ら〜向く〜り
と代あ〜〜情い〜り
行く〜人〜の合〜れ〜し
正家物〜〜と利く村
ひ〜ら〜子の高ら〜る
遠〜元〜便知を〜あ〜り〜り
大倉は備の剣〜 執る
松風〜あ〜り〜と〜然の恩
らあ〜り〜り 壬 正月

るるるるるるの ぬるるるるる
七りちの 抱きく 祈り
うつりく ぬるる ぬるる ぬるる
ぬるるの ぬるる ぬるる
ぬるる ぬるる ぬるる ぬるる
ぬるるの ぬるる ぬるる ぬるる
ぬるるの ぬるる ぬるる ぬるる

寛文三年辛卯日と異耕の秀逸と撰
集りて武玉川と号す梓行して航尚
成年進歩七等及ぶ乃高時及ぶ
隆盛なりと志すぬ日のとそしを凡
航のゆきはとふる形一講小治世の務
修く下や上と文ふね航ハ若門子
の遠徳ゆき門と並へる正才二十七人
ぬるるるるるるるるるるるるる
は削と名位ふ新古とよりから林麻をり

襲らるる乃の枝影とさしぬお句の奇
雨句のそ多うた様習而祐の回意ふ
等しく思ふ味あうきふお又言一
是れ諸ふ屋する村は様ふ物すると
六ふお羽の教さうんう平けはさおのさ
苦席ふはさわくく出物ら句こ言矣
小乃一と此等くたふ記す是の所会
句化のユ案のこあを判志のさしおふ
しうく卵の多うむしちらんこさわく

生便の案くうらお齋ふらうこれとさ
好秋といくの中じ昔ふ凡流さうし
存義と矣

茶少ふ及止さふちうく口多ひん

牙の謀換とくくは

有依と矣

姉ふちうくぬ殿乃津去下結

青い夕食とれ長そ言

平所と矣

母親、鼻をさすあも七泪を

赤は山のきい合ふ家

茶仲矣

夕虹を縁の上ちる子小教

先危下の光る山下

袂忍矣

度寺小寂念の能つて心

水の濁る目にかきつる心

夢の如矣

殺匠志の弟を修小問の後の

仲間もみ人す小を成佛

梅川矣

細舟小足お舟を漕ちる心

あふきつる心隠す級小

喝小矣

起るるく戸をくむを元を

松葉と髪斗目写す如日

此千矣

狸の身を伴つちこも川

鼓林のえんちこちこちと尋ぐ

る京兵

一目惚る大空をたぐ

大徳の今も我もいこいほれり

再び京兵

大石と百もふまゝに水田の傍

時ふれ律をらるる 新日

珠本兵

和泉本アのりつらお云

夜よこゝと息の果るふまゝてぬる

万立兵

風の接ふちをいふ西虎

海ちりけりて大橋と哉

起る京兵

蛇牛遠ぬけし指と本

庭よこゝと息れん後のもお云

秀億兵

拙子もとふ心折切ら水乃鹿
一段も幸小同——因一友

吉門兵

化の面多し北ぬ鳥小まを付る
義くくも志笑の人の換平

嘉延兵

以はるの約束に所立田振

い志をく小海作包す去笑

柳形兵

時く来さひく度る此の夜

信一傘のう階わくくま

書小兵

鉄炮く舟にせく次なる月

そく仰腕 ち千——ととと

鶏口兵

何くくと去く二井の禱少

長ちる目とむらるる十りと

柳尾兵

雉子啼や山の峰まじし
のらぎけり

誦諧武玉川

紀逸撰 一冊

十五頁以上秀逸の句と集
しとる附合のたよりと云

- 初編 續海 夏白入 三編 四編 抄今言白入 五編 八編
- 夏白入 六編 附合の條入 七編 八編 九編 十編
- 十一編 十二編 十三編 十四編 十五編 在秋入
- 十六編 四季發白入 十七編 出束 十八編 在刻

此後より追く出レヨ

同 室砂子

當時在房の上巻 出束
秀逸の書下巻 出束

東都書林

小石川傳通院前

雁金屋儀助

西岳華山

廿五

南岳衡山

三十

北岳恒山

四十

中岳嵩山

五十

四時樓紀逸

白丹

紀齊

十六卷三

中興縣志

紀齊

十七

